

獣医さんのお仕事 in異世界11

蒼空チョコ Choco Aozora



アルファポリス文庫



カイン

ラヴァン領の次期辺境伯。世界平和のために旅をしている。

エレイン

カインと旅する冒険者。末席の王女様で、何やら不思議な力を持つらしく……？

アカネ

カインと旅する冒険者。風見と同じく日本から召喚され、西の国で兵器を作り大きな影響を与えた。

サヤ

リズの双子の妹。お姉ちゃん大好き子なのに素直になれない、ひねくれ者。リズ目当てで風見についてくる。

リズ

ニヤリ笑いが似合うウェアウルフの少女。東国エンルスの奴隷だったが解放され、晴れて風見の仲間になった。

クロエ

ハドリア教の神官にして、風見の付き人。清純で勤勉な乙女だが、風見を慕う気持ちが強すぎて、暴走することも。

キュウビ

幻術を得意とする、人間と妖狐のハーフ。実は二代目狙下の娘。

ナトウレル

風見に命を助けられた魔物娘。本体である核が、風見の左手に宿っている。

クイナ

ウェアキャットの少女。風見を第二の父のように慕い旅の供をしている。

かざみしんご 風見心悟

ラノベやアニメを嗜む、公務員獣医さん。ひょんなことから異世界に召喚され、その世界に生きるもの達を救うべく奮闘中。

Main
登場人物
Characters

プロローグ

五代目マレビト風見心悟はつくづく思う。朝飯前なんて言葉は、この異世界ではなかなか馴染まない、と。

時季は冬。それも未明ともなれば、うんと冷え込む。体が温まる食事を取ろうと思うと、それなりの労働が不可欠だ。

風見が東国で女帝グローリアと決着をつけて、ここアウストラ帝国に戻った翌日。

風風ぎ原と呼ばれる平原にある彼の屋敷では、ウエアウルフのリズと双子の妹であるサヤが、薪割りに勤しんでいた。

この二人は長らく東国の女帝の配下であり、昨日、晴れて解放された。風見がずっと行動を共にしていたのは姉の方で、妹は人質として東国に囚われていたのだ。いろいろあったが、風見は二人をまとめて引き取り、面倒を見ると決めた。

再び共に暮らせるようになった妹に、リズは厳しく言う。

「サヤ、せかせかと働け。暖炉に、竈に、パン焼き用の窯。薪はいくらあっても足ら

んよ」

「……うー眠いよ、姉さん。ご主人ならメイドや執事を雇うか、さもなければグレンにでも任せればいいのに。か弱い私になんでこんなことをさせるんだか」

サヤはしょぼつく目を擦ってぼやく。

けれどその割に作業は手早い。斧係の彼女が薪を割ると、リズがすぐに次を補充する。薪割りは大い薪の山がなくなるまでさくさく進んだ。

しかし、一山分の薪を割り終えたところで、サヤは音を立てて斧にもたれかかる。

そして、薪の運搬係の三人に向かって手を伸ばした。その先にいるのは、風見、魔物娘のナトゥレル、隷属騎士団元副団長のグレンだ。

「ごーしゅーじーん……。グーレーン……」

手助けを求める声を撥ねつけられず、風見とグレンは仕方なく苦笑する。

そうして手を貸してやろうとしたところ、リズが切り株の作業台に薪をドンと置き、遮った。

「援護はなしだよ。仕事に縛りつけておかないと、サヤは朝餉まで眠りこけるからね」

「……姉さんみたいにご主人のベッドで寝ていたらぐっすり快眠ですぐに活動できたのにいー」

何かしらの弱みでも突けると思ったのか、サヤはぼそっと呟いた。対してリズはそれ

がどうしたと言わんばかりの薄い反応を返す。

「そう思うならお前も勝手に押しかければいい。別に止めんよ？」

まったく、言い争ってばかりの姉妹だ。風見は息を吐く。

「ベッドを使うのはいいんだけど、下着くらいはつけて寝てくれよ。シーツを剥ぎ取ったら全裸でしたなんてのは、心臓に悪いから」

「ご主人のベッドのシーツは柔らかいでしょう。素肌の方が気持ちよさそうなんですよね」

「まあ、寒い時は着るよ。寒い時はね」

サヤとリズは、風見から顔を背けた。いつも何かしら言い合っているのに、この姉妹はこんなところだけ本当に似ている。しらっと視線を流して、彼女らは薪割りを再開した。

風見は拳をブルブルとさせた後、息を吐く。この姉妹はこうなのだと言いつつ黙って割り終えた薪を抱えた。その後はグレン、ナトゥレル——ナトと共に厨房に移動する。

厨房の設備はピザ窯に似たパン焼き用の窯と、二口の竈がある立派なものだ。火番兼調理係として、クロエとキュウビがそれぞれフライパンを振っている。

その他にクイナ、風見付きの隷属騎士として世話になっているライとシーズ、セラは、厨房と食堂を行き来している。彼女らの仕事はパンの焼き加減の確認や配膳だ。

セラは皿と料理を食卓に並べながら、傍そばにいるクイナに文句を言う。

「もうっ、なんでセラが配膳なんですかっ!? お姉様が二人! 二人分の包容力がそこにあるのにセラは間に挟んでももらえない! こんな世界の大きな損失ですっ!」

リズをお姉様と呼んで慕あこがっていたセラにとって、リズと瓜うり二つなサヤが仲間入りしたことは幸せが二倍になったようなものらしい。

「ええ……。セラ、そういうのはあとでもいいし、今はご飯の用意……」

「クイナはずっと旅について回っていたんだから、お姉様欠乏症になってないじゃないですかっ! セラはお姉様成分が足りてないんです!」

「う、うん。わたしはそういう成分はいらなかなって思う」

そんなやりとりをする中、風見たちに気づきづいたセラはさっさと皿を置き、向き直むきってきた。

「あっ、来ました。ほら薪まき運びは交代です。こーたい!」

「うおっ、いきなりどうした!」

セラは風見をバシバシと叩たたいて薪まきを奪さらうと、すぐに竈かまどの脇わきに置いてリズらのもとに向かってしまった。

欲望に忠実な上にパワフルだ。風見は呆然ぼうぜんとして見送る。そうしていると、いつの間にか隣にいたクイナが風見の裾すそを引ひいてきた。

「シンゴ、ごめんね。セラの代わりにお皿を並べるのを手伝ってくれる?」

「俺の仕事を取られちゃしょうがないな。まあもう少しで朝食の準備も終わるだろ」

そうしてクイナと共に配膳はいぜんをする――。緊迫きんぱくした情勢せいせいにそぐわぬ平和な朝の光景こうけいだった。

先日、このラヴァン領の領主であるドニが、東国の女帝グローリアの策略によって命を落とした。その後風見は、女帝の奴隷だったリズの解放や石化病の解決、東国で不由ふゆに暮らしていた魔獣カトブレパスの境遇改善、果ては伝説の武器と戦闘までしたのに、嘘うそのような和やかさである。

ドニの城では葬儀、領主権限の相続、正規騎士の責任問題などのせいで、まだごたごたしている。ちなみに、今日ここにいない皇族特務騎士のクライスは、そちらの対応に当たってくれていた。当分は任せきりになるだろう。

とてもではないが、こんな束の間の休息を得ていい状況ではない。サヤの奴隷契約は、契約主だった亡きドニに代わり、風見が主あるじになるよう更新する予定なのだが、それもしばらく先送りとなる。

悩ましい問題は山積みにもかわならず、ゆるい空気なのはメリハリというやつだ。

風見はアウストラ帝国と東国が、西国に対する共同戦線を張るための仲介役を頼まれている。

そもそも西国が増長したのは、そこで召喚されたマレビトが原因だった。同じマレビトの風見が無関係でいるなんて許されないうら。だからこそ、覚悟を決めるための休息を取っているのだ。和食と洋食を軽く取り揃えた朝食がほどなく完成する。クロエを除いたメンバーはそれぞれ席についた。

ライたち隷属騎士の付き人と食事をするのは久々だ。特に十代後半という食べ盛りのライは、燻製肉や卵の品揃えに興奮していた。

「うおーっ、カザミの兄貴との朝食！ 匂いだけで涎が止まんねえよ。早く食おう！」
「ライ君。はしたないから狎下の前でそういうのはやめてったら」

香ばしく焼かれた肉の匂いを嗅いだライは、ナイフとフォークを振り上げる。それを見咎めたシーズはなんとか腕を下げさせながら、風見に対して頭を下げた。

だが興奮しているのは彼ばかりではない。その隣の肉食系な兎もうずうずと震えていた。

「うっ。セ、セラはこんなもので懐柔されませんから。こーして一緒に食べる豪華なご飯が待ち遠しかったなんてことは、ありませんからっ」

そうは言うものの、セラは唾液を嚥っている。肉の魅力に屈する時も近い。そんな彼女を横目で見たグレンは、ため息をつく。

「何を言っておるのだから。お前は狎下殿がいない間、早く戻らないかだとか、クイナが羨ましいだとか言っておっただろうに」

「い、言っていないですよー!? セラはお姉様が待ち遠しかっただけですから！」
チラとこちらを見た彼女は、風見と視線が合うなり目を逸らす。

まるで思春期の娘だ。そんな態度を取られると、少し辛い。風見は傷心気味だ。

セラはその様子も見ていたらしい。気まずそうにするとうらの言動に補足をした。
「言い訳ではなくですね、ほら、故郷のキツネ様でしたか。クイナがそんな人に見初められて羨ましいだけです。こんな身分のセラたちは戦う力が重要ですし。要点はそこですよ、そこ！」

彼女が見やるクイナは、キュウビとナトに挟まれて座っている。

クイナは以前からキュウビの稽古を受けていたが、最近はどうもナトまで一枚噛みはじめたようだ。竜種程度は平気で殴り倒す人外の師匠二人に挟まれ、クイナは身を縮こまらせている。

「だったらセラも一緒に訓練する……?」

クイナはセラに虚ろな目を向ける。

「そうそう、生きるためにもいっそ一緒に訓練を——へあっ!? ええっとお……」

これは敷蛇だったらしい。あらぬお誘いに、セラは言葉を濁らせた。

そんなセラが恐る恐る目を向けるのは、件のキツネ様ことキュウビだ。彼女は目を細め、にんまりと笑む。

「あらあら、楽しそうですわね。同年代での切磋琢磨。わたくしとしては手間でもありませんわ。ねえ、ナトウレル。あなたはどうぞでしょうか？」

キュウビは美味しそうな獲物が自ら転がり込んできたことにご満悦だ。

水を向けられたナトも、特に嫌がる素振りを見せることなく頷く。

「今までは二対一だった。一人増えれば二対二でちょうどいい。ヴィエジヤの樹海を散歩できるくらいまでは鍛えられる」

「そこ、魔境！ 帝国の精鋭部隊でも調査不可能な未踏破地域ですからっ!？」

「大丈夫。一定以上に強い魔物は回避と創意工夫でしかどうにもならない。怖がる意味がない」

そんな返答を聞いたセラは、まずいいことになったと視線を泳がせる。けれど助けはない。

そうこうしているうちに、クロエが焼き上がったパンを持ってきた。これでようやく面子が揃ったので、いただきますと手を合わせて食事始める。

この穏やかな時間が、ずっと続けばいいのに。そう思うところだが、次に控えるものがある。しばらくすると、風見は今後について切り出した。

「——食べながらでいいから聞いてくれ。戻ってくるなりこうして朝食に誘ったのは、一緒に食べたかっただけじゃなくて、今後についてお願いがあるからなんだ」

一同はそれまで旺盛な食欲を見せていたが、風見の真剣な声を聞いて動きが減る。

「ドリアードに会いに行く前にも言った通り、農業や医療についての土台作りは終わって。本来ならその発展に取り組みたかったけど、西国の情勢から目を逸らし続けるのも無理だと思う。関わったものが増えた以上、いずれ大なり小なり影響を受ける。好き勝手されないためにも、後手のままじやいられない」

以前とは確実に異なる考えだ。それを自ら口にしたのは、風見がこの世界に少し順応したからだろう。

だが、それだけだ。自分の知識を有効活用できることは知っている。しかし、それをどうしたら最大限活かせるのか、活かした先で何が起るのかを推測することはまだできない。

至らないから、信頼できる仲間に助けてもらいたいのだ。

「この先、俺は自分の分野でできることをするより、今あるものをなくさない努力を優先することになると思う。現状で言えば、戦争絡みのことで大きな問題が起る前に対策を取るとかな。みんなには、その手助けをしてもらいたい」

状況によっては、元の世界では許されていない形で知識を利用する必要もあるかもしれない。

れない。それを考慮に入れても、関わった全てを守っていけるかどうか不確かだ。そうみんなに伝える。

風見としては忌避感を隠せないことであるが、選り好みできない。やつと覚悟を決めた、勇気のいる決断だった。

しかしリズらにしてみればようやくかともいうところなのか、驚きもなく受け入れる。

「別に汚れ仕事でもなんでもやるよ。今さらそんなものを嫌がるわけがないしね」

リズは事もなげに言う。そんなことよりもサヤと最後のソーセージを巡る争いをする方が重要らしい。フォークをがち合わせるばかりで、ほとんど視線もくれない。

それを咎めるのを諦めたクロエは、風見に視線を向ける。

「確かに技術の悪用かもしれません。でも風見様は何かを傷つける技術も、殺す技術も、誰かを生かすために活用してきました。だから私はその歩みがこれからも変わらぬよう、お助けします」

他のメンバーも似た意見らしい。クイナとキユウビは笑みを浮かべて風見を見つめ、ナトは無表情ながらも視線を送ってきた。サヤとグレン、セラ、ライ、シーズの五人も頷いてくれる。

全員が自らの意志で手助けしてくれるようだ。風見は胸に熱いものを感じて口元を緩

める。

「ありがとう。それなら俺も、この後の会談で心置きなく発言できる」

この国の皇太子ユーリスと、東国の女帝グローリア。そして、ドニの息子であるカインらも参加すると聞いている。

どう転ぶかはわからないが、目指すべきものは定まっている。あとは会談に臨むのみだった。

第一章 これからを見据えます

朝食を終えて身支度を整えた風見は、仲間と一緒にアースドラゴンのタマや飛竜、馬に乗り、バルツイ砦とりでに向かった。それには、東国での一件から行動を共にしているカトブレパスも同行する。彼の周囲を石化させる能力は、風見の霊核武装で無効化しないと、周囲に害がありすぎるからだ。

そんな大所帯で砦とりでに近づくと、意外なものが目に入った。それは揃いのローブを羽織おった集団である。

「あれはハドリア教の神官騎士ですね。白服しろふくも一部含まれています」

風見と一緒にタマに騎乗していたクロエには、遠方からでも判別がついたようだ。

想定していなかった事態に、風見は首を捻ひねる。

「教会の行事でもないのに、なんで白服とかがここにいるんだ？」

「国際的な会議は軍事要素が絡まないよう、ハドリア教が取り仕切る場合があります。

普通は宗教団体が割り込んでくるなど邪険にされますが、今回は事情が事情だからかもしれません」

クロエの答えは、実に腑ふに落ちるものだった。

要人には護衛が必ず同行するものだ。しかし護衛が幅を利かせて、脅おそしに走ったらどうだ。そんなものに国際会議が左右されるなら、最初から武力で争えばいいという話になってしまう。

だから、中立の立場であるハドリア教が場を取り仕切るのだ。彼らはこの大陸の第一宗教であり、国同士の仲裁にままで担なう。単なる宗教というより国連の役割に近いだろう。

そんな風に風見が納得しているうちに砦とりで前に到着した。

するとハドリア教の神官騎士たちが、わらわらとタマに近寄ろうとする。ハドリア教の敬愛するマレビト風見がアースドラゴンと行動していることは周知の事実。マレビトとドラゴンを目まの当たりにし、神官騎士たちは熱狂しているらしい。

タマにとつては迷惑なものだ。人が増えるにつれて嫌悪感が強まるのか、風見とクロエが降りるなり、カトブレパスと共にこの場から離れた。民衆からは惜しむ声がかかるが、仕方がない。

飛竜や馬から降りたりズラと合流していると、幾名かの白服が走ってくる。彼らは風見の前で頭かぶを垂れた。

「お初にお目にかかります。猊下げいかでいらっしやいますね？」

久方ぶりのお堅い平伏に、風見は苦笑気味で返す。

「ああ、そうだ。クロエから聞いたんだけど、ここにいるのは会談の運営を任されたハドリア教の関係者ってことではないのか？」

「相違ありません。大陸の平穩へのご尽力、心より御礼申し上げます」

白服の先頭にいる男性は、心から感服している様子だ。彼は片膝をつき、面を下げるままである。

「できる限りのことはしないと後味が悪いからな。ところで、そろそろ頭を上げてもらってもいいか？」

風見が頼むと、先頭の男性は逡巡した様子で仲間を振り返り、頷き合う。

「それでは失礼して。皇太子ユーリス様と東国のグローリア様は到着されています。猊下も会議場に向かってください。追って、今回の意見役としてドニ様のご息が到着されるはずす」

風見はわかったと頷いた。すると神官騎士たちは一行の武器を預かってから、会議場へ先導してくれる。

皆には神官騎士が何十人という。クロエは見知った面々が懐かしいらしく、隣で控えながらも周囲の人々に目をやりがちだった。

道中会話がないのも辛いところなので、風見は先導の白服の男性に問いかける。

「ところで、ここにいる白服はクロエと面識があるのか？」

「もちろん。もつとも、私などは彼女の後塵を拝するばかりでしたが」

「いいえ。先輩方は優れた素質をお持ちなので、私が学ぶべきものは今でも多いと思いますす！」

白服は神官騎士の中でも一部の者しかねないエリートである。二十代半ばと見られるこの男性も、帝都の騎士団長や副団長を目指せるだけの逸材のはずだ。

彼はクロエから向けられる尊敬の念を、笑顔で受け取る。

「ありがとう。しかし女性統括官のライラ様が手塩にかけて育てた君に比べれば、私はまだまだだ」

「あ、あはは。ライラ様……」

ライラという名前が出た途端、クロエは怯えた表情になる。

そういえば、ラダーチの街でその女性統括官とやらの話をした時もこんな様子だった。

「ライラ様って、前にも聞いた覚えがあるな。どんな人なんだ？」

風見が尋ねると、クロエは体を縮こまらせる。

「厳しい方です。それだけに、指導について思い出したくないと言いますか……」

こんな風に言い淀むなんて珍しいことだ。その人物はよほど厳しかったに違いない。

その時、警備がより厳重な場所が見えてきた。指令室として使われることもあるバルツイ岩の屋上施設だ。どうもここが会議場となるらしい。

その警備の中に、一人だけ目を引く人物がいることに気づいた。白服は肉体的に最盛期の二十代前後が多い中、白髪が交ざりはじめた四、五十歳と見える女性が立っている。背筋がピンと伸びていて、気の抜けた様子なんて微塵もない。周囲の警備が緊張していることから、正体は予想できる。

「呼びましたか、クロエ？」

「ひゃひいつ!」

やはり、彼女が噂のライラであるらしい。

クロエは彼女の声を耳にした途端、飛び上がる。ライラの声には謹聴せよと軍隊じみた刷り込みでもあるかのようだ。

脂汗を流しながら狼狽するクロエ。彼女を鋭く見据えるライラの眼光は、まさに鬼教官のそれだ。そして、一つのため息と共に品評が下される。

「クロエ。そのように情けない姿を指導した覚えはありません。私は何を教えましたか？」

「かつ、風見様を誠心誠意お支えしていますが、その……。こつ、子作りはまだでっ——!」

付き人としての役割には子作りも含まれるという。クロエは苦しい報告のせいで、お叱りがあると身構えた様子だ。それを見たライラはまたため息をつく。

何が悪いのかゆっくりたつぷりと自分で考えさせる間を挟む、絶妙な圧迫感だ。

「それは一部の枢機卿が命じたことでしょう。話を聞く限り、あなたが共にいる間に狽下が為された功績は恥じるものではありません。このまま精進しなさい」

「えっ。あ、はいっ。肝に銘じます……!」

思いがけず褒められて、クロエは面食らったようだが、すぐに頷いて返す。

「狽下、かねてよりのご活躍、お祝い申し上げます。私は白服の統括長で、ライラ・リスト・クローウエルと申します」

ライラはそのまま風見に視線を移し、改めて頭を下げた。マナー講座の女性講師のように優雅な振る舞いで言葉が続ける。

「付き人は、白服ならば誰もが望む榮譽。当然、優秀な者が選ばれますが、このクロエにはまだ至らぬ点があります。我が門下生の中に彼女より優れた者がいないとも申せません」

「うっ。うぐうっ……!?!」

冷静な言葉の一つ一つが刃となつてクロエの胸に刺さり、彼女は呻く。そんな光景が隣で繰り返られるものだから、風見はライラの話に集中できない。

だが、その直後に「ですが」と続いて、流れに変化が生じた。

「彼女は伸びしろを有しております。その点言えば、他者に引けを取るものではな

いと、私は確信しています。許されるならばお聞かせを。猊下にとつて、クロエは良き付き人ですか？」

核心を問う言葉だ。クロエの不安を払拭するためにも、風見は胸を張って答える。「そうですね。クロエは能力が高いのはもちろんですが、近頃は精神面でとても頼りになっていきます。クロエが付き人でよかったですと思っっています」

「それはこの上ない返答です」
風見の返答にライガが頷く。同じく言葉を耳にしたクロエは震えるほど喜びを抱いている様子だ。

では、会場へご案内を、と事が運ぶと思つた矢先、うおーんと遠吠えが聞こえた。タマの声である。遊びで小さな声を漏らすことはあつても、このように声を上げることは滅多にない。何か大事でもあつたのかと、風見はそちらの空をばつと振り返つた。すると目に入ったのは、碧色の大翼だ。四肢に加えて翼を持つ竜——つまりドラゴンである。

その姿を目で追うと、旋回したドラゴンが岩の端に着地した。吹き下ろしてくる強風に耐えながらなんとか目を開き、その姿を見る。

全長は二十メートルから三十メートルだろうか。溶岩を思わせるレッドドラゴンとは対極で、その竜鱗は海の色を投影したかのような色だ。

強靱さと身軽さを兼ね備えた火竜とも、強靱さを追求した地竜ともまた異なる。

尾はヒレに似て扁平で、前脚にはこれまたヒレとも飾り毛とも見える部位を持つことから、水に適応しているのだろう。

このドラゴンこそ、水竜の頂点、ブルードラゴンに違いない。

『よもやドラゴン以外の魔獣が外界を歩き回る姿を見る日が来ようとは。なるほど。今のマレビトはいずれも特異よな。そちが妾の鱗を与えし白服が守護するマレビトか』
ブルードラゴンは、興味深そうに見つめてくる。けれど風見は驚きで言葉を失つていた。

ここはブルードラゴンの領域から千キロは離れている。魔獣が領域を離れるのは大きなりスクを伴うため、こんな遭遇はありえないはずなのだ。わざわざここまで来たことに疑問を抱かずにはいられない。

そこまで考えて、風見はもう一人のマレビトであるアカネや、エレインらのことを思い出した。

彼女らは武力侵攻を図る西国を止めるべく、魔獣に助力を求めていた。その次なる目標こそ、ブルードラゴンだったはずである。この来訪は、それに関連することだろうか。予想は遠からずだったらしい。ドラゴンの背から見覚えのある女性が降りてきた。

彼女はよく梳かされた髪をなびかせて歩いてくる。その容姿や佇まいに確かな気品を

感じさせる一方、そこらの冒険者に負けない芯の強さを瞳に秘めた女性だ。

記憶にも色濃く残っている。彼女はこの南の帝国における末席の姫、エレインである。以前会った時に彼女と行動を共にしていたのは、西国で召喚されたマレビトのアカネ、ドニの息子であるカインと、待じみた剣士のシギンだった。

けれどもエレインの後に続くのは見知らぬ男性一人だけだ。

見かけは三十代後半から四十代。頭は硬い毛質の短髪で、顎には無精髭が生えている。彼はフルプレートフルプレートの鎧よろいではなく、体の線に合う竜種か何かのスケイルアーマーを身につけている。

鎧よろいからして動きやすさを重視しているのだろう。実用性を追求して鍛え上げたに違いない筋肉は無駄がなく、がっしりとした体つきだ。その佇まいたてまつりを文字で表現するならば、武人の二文字以外にない。

そんな男性を後ろに率いて、エレインが近づいてくる。

「お久しぶりね、カザミ。大事はなさそうで何よりよ」

「ああ、久しぶり。そっちはどうなんだ？」

行動を共にしているはずの仲間がいないから、悪い想像をしてしまう。

その勘は当たらずとも遠からずなのか、エレインは悩ましげな顔で答えた。

「平穩無事とは言い難いわね。だから私と彼だけで来たわけだし。でも安心していいわ。

面倒な事態に見舞われているだけで誰かが欠けたわけではないから」

そう言ったエレインは、後ろに控える男性に手を向ける。

「紹介するわ。彼は北国のレギオニス中将。北国の軍事を束ねる総帥そうすいのご息子よ。北国内において対西国の軍事を統括している偉い人」

王族の次に偉いと言っている人物だ。予定にないその登場に周囲はざわめく。

「それも過去の話だ。すでに軍も将来もあつたものではない」

レギオニスと紹介された彼はエレインの話に首を横に振り、前に出てくる。彼は風見より頭一つ分は背が高い上、鍛え上げた体付きでかなり大柄だ。しかしながら脳筋という雰囲気はない。実力も込みでその地位についているのか、理知的な印象も感じられた。「これから西国についての会談でしょう。それに関して彼からも話したいことがあるそうなのよ」

「え。でもいくら前から北国は国境線で敗走して、西国に侵略されつつあるって……」

話を持ちかけてきても手遅れ。そんな考えを思わず口に出してしまい、風見は慌てて黙る。

レギオニスはそれに対し、静かに頷いた。

「確かに出鼻をくじかれた上に敗色が濃い。これから西国を押し返すのは難しいだろう。だが、それでもまだ全てが終わったわけではない。私には託された使命がある」

深刻な表情で語ったレギオニスには相当な決意が窺える。エレインもそれに頷いた。「私にも彼にも、今日の会談ではすべきことがあるの。監督役のあなたたちもよろしく頼むわね」

エレインはまずライラたち白服に会釈した。

次に目をやったのは、風見の後ろに控えていたリズだ。

先日、リズはカインの父であるドニを刺殺した。そのことが伝わっているからに違いない。

風見は緊張の面持ちで二人のやりとりに注視する。

「そっくりさんがいるけれど、私が会ったことがあるのはあなたでいいのかしら？」

リズとサヤは双子だ。迷うのも無理はない。とはいえ、最後に会った時の容姿そのまなのはリズだ。それに意味ありげに視線をやっているのもリズなので、察したのだろう。

風見はせめてフォロローしようかとリズに目配せをした。だが、彼女は首を横に振る。

「合っているよ。それから、私から言うことがある」

「お義父さんのことよね。わかっているわ。そのために私は一人で来たんだもの」

「おとうさん？ ……えつと、それは皇帝じゃないよな。ドニさんのことか？」

エレインの言葉に違和感を覚えて、風見は戸惑う。それに対して彼女はしかと頷いた。

「ええ、ドニさんのこと。先日、カインと結婚したからドニさんは私にとって義理の父になったの」

「いやいやいや、そんな先日引越しましたみたいに軽く言われても!？」

先日と言うからにはひと月も遡らないことだろう。

驚くと同時に、疑問を抱く。いくら末席の姫でも、噂も気配もなくいきなり有力貴族と結婚することなんて、ありえるのだろうか。

動揺しつつ、風見はリズをちらりと見る。彼女も戸惑ったらしく、切り出すはずの話が引っ込んでいた。

周囲を混乱に陥れたエレインは一人だけ自由だ。さくさくと歩き、リズの手を取る。

「突然届いたお義父さんの訃報を確かめるために私だけが来たの。あなたの事情は察しているわ。大変だったのね。それでも、誠意をもって事の顛末を伝えようとしてくれたのでしょうか？ でも、ごめんなさい。そういう真実だけで綺麗に和解できる状況ではないのよ」

エレインはリズを見つめた後、風見に視線を戻す。

「この国において貴族や王族は絶対の権力者。その権威を守るためにも、殺害に関わった人間は死罪になるものよ。たとえ、抗えない命令で操られていたとしてもね」

エレインが口にする冷たい宣告に、風見は息を呑む。

事が事だ。お咎めなしとはいかないのは理解できる。しかし、はいそうですかと受け入れられる内容ではないのだ。風見はそれとは別の折り合いのつけ方を思案する。

もつとも、それはいらぬ心配だった。エレインは「——というのは建て前の話ね」と、今までの緊張を自ら崩してくる。

「驚かせてごめんなさい。もちろん、私もそんなのは望まないわ。だって、規律通りでは誰も得をしない。だからいい方向に事を運びたいの。カザミ、あなたの大切な仲間を守るように便宜を図るわ。その代わり、私はこの弱みにつけ込んで一つ要求したいことがあるの。許してくれる？」

忘れていた。エレインは一般的な権力者の弁を語るだけの人間ではない。

目の前に悩ましい問題があったとしても、それを思い切り蹴飛ばし、本当に望ましい結果を直接取りに行く。そういう女性だ。

「いい申し出には聞こえる。ただ、内容によるな」

エレインは先ほどまでの引き締めた顔ではなく、友人にでも接するような表情で口を開く。

「カインをね、助けてあげてほしい。それがひいては北国を救うことにもなる。だからレジオニスもこの場に足を運んでいるの」

エレインの呼びかけにレジオニスが頷いた。そして風見の手を両手で力強く握り、見

据えてくる。

「現代のマレビトは、一国の軍をも凌ぐ強者だと耳にしている。願わくは、その力を借りたい！」

レジオニスに握られている手が痛い。しかし具体的な話を聞いていない風見は困惑した。

「い、いや、待つてくれ。期待をされても、無理な要望には応えられないからな？」

勢いのみで面倒事を押しつけられるなんて、最も望まないところだ。

そう思つて一言断ると、エレインは首を振つて返してきた。

「私はあなたにならそれができると思っている。でもそれは、あなたの主義に反することまでさせてしまうことになりそう。だから謝るわ。私は、私が大切にしているもののために、あなたの弱みにつけ込むの。悪い女よね」

彼女は眉を寄せて語る。そこには申し訳なさを感じるが、迷いはなかった。

こんなに割り切った判断は風見にはまだまだできないことだ。彼女の覚悟と考えを前にして、素直に感心する。

「悪い女か……どうなんだろうな。俺にはまだよくわからない。時と場合によつては、そうやってなりふり構わずにできることをしなきゃ、守れないものもあるとは思う」

日本ではそういったことに全く馴染みがなかった。何かを捨てたり、傷ついたりする

こともない。誰しもにとつての善事をし続けることが美德だった世界の生まれだからこそ、こんな時の判断は迷ってしまう。

と、その時、今まで大人しく聞いていたライラが間に割り込んできた。「お話し中のところ申し訳ありません。お時間が迫っております。皇太子様たちをこれ以上お待たせするのは、いかがなものかと」

確かにいくら重要な話でも、国の要人を差し置いてするものではない。風見とエレインは、揃ってライラに頭を下げる。

では改めてと会場に先導し直すライラに続きながら、風見はエレイン、レギオニスに並んだ。

すると彼女は真面目な様子で目配せをしてくる。

「本当は今の状況を詳しく話しておきたかったのだけれど、こうなったら手短かに話すわ。先が見えていた方が話は見えやすいでしょうし。何よりね、あなたたちの便宜のために、会談で話してほしいことがあるの」

エレインはそう言うと、カインに何故助けが必要なのかを掻い摘んで説明しはじめるのだった。

すぐに向かうとは言っても、東国の女帝とこの国の皇太子が相手なのだ。会談は、最

低限の身だしなみを整えてからである。

その会談に席を用意されたのは、風見を除くとたったの五名だ。

ここアウストラ帝国の皇太子にして宰相であるユーリスと、その隣のエレイン。彼らの向かいには、昨日まで風見が争っていた女帝グロリア。それに加えて、司会進行兼警備として場を見回すライラに、ゲストとしてレギオニスだ。

場には距離を置いて向かい合うように机が置かれており、ユーリスとエレイン、グロリアが対面して座っている。そして風見がグロリアの半歩後ろに、ライラとレギオニスは両者を見通せる中間に立っていた。

余談だが、グロリアは酷く不満そうに風見を睨んでいる。この場は議題以外の何物も絡まないようにと、護身用の武器も護衛も禁止——なのだが、それに関するお咎めに違いない。

非常に申し訳ないことに、風見としても違反の自覚があった。その原因は、ナトである。

ナトは風見の左の手のひらに埋め込まれた魔獣の核に宿っているのだ。今は姿がないが、何かがあれば即座に体を形成する。言わばSPと同じで、主人の保護が第一。少しでも懸念があるのなら、主人から離れることを是としないのだ。

風見は気まずい顔で、グロリアに手を合わせた。

「まあ、大目に見よう。お前は中立に変わりないしねえ」

着席するグローリアに、裏手でべしりと叩かれたが、それだけで済んだ。

この程度で許してくれるのは、勢力関係が影響している。エレインは南の帝国の姫で、立場としては完全にユーリス側だ。グローリアとしても自分の仲間が欲しいのである。

一同がそれぞれの位置についたことで、会談の準備が整ったと見たらしい。ライラが口を開く。

「それでは、リイル・リスト・ヴェンツァすうまきまう枢機卿の名代として、ライラ・リスト・クローウエルがこの場を取り仕切ります。各々方、これは大陸の安寧あんねいを懸かけた会談であることをお忘れなきよう」

ライラが釘を刺したものの、皆がそれに素直に従うわけがない。

グローリアは高圧的に、ユーリスは人受けのいい顔で視線を交わしている。これは静かな殺意を投げ合っているのだ。放置したらロクなことにならないと予想し、風見は真つ先に手を挙げた。

ライラはそれを認め、「どうぞ」と発言権を与えてくれる。

「悪いんだけど、俺は北と西の国境で小競り合いこせがあつて、西側が勝ったつて話しか知らないんだ。まずは近況がどうなつているのか教えてほしい」

風見はそう言つて、エレインとレギオニスに目を向けた。

彼女は、西国が北国に仕掛けた戦争を、アカネらと共に止めることを目標にしている。ブルードラゴンに会いに行ったのも、その活動の後押しを得るためだったはずだ。

ユーリスもグローリアも風見の意見に異論がないらしく、頷うなずいてくれる。すると、エレインは難しい顔で語りはじめた。

「あまりいい状況ではないわ。西国は元々、豊かじゃなかった。この大陸の四国でも最弱。部族ごとの集まりがあるだけで、国としての体裁ていさいを保つのもギリギリだった。でもそれは知つての通り、異世界の兵器がもたらされたことによつて変わったのよ」

その説明に対し、ユーリスはよく知つた顔で頷く。

「そうだね。あの国は弱かつたし、貧しかった。村単位で生きていて、魔物に対抗しきれていなかった。それが一年ほど前、女子供でも簡単に扱える兵器を作り出し、魔物を撃退しはじめたから大変だ。魔物によつて口減らしされてきたから食料を確保できていたのに、生存率が上がつて食料難に陥おとつた。だから、自国民を抱えるために周辺国を襲い出す。——そもそも、カザミを召喚したのは、この情勢への対抗手段だったからね」

当然の知識だという風のユーリスに対し、風見は目を点にした。

「えっ。俺は聞き覚えがないんだけど……」
西国の情勢が不安定という程度のことでは聞いたことがあるものの、これほど詳しい話は初耳だ。

驚く風見をちらりと見ると、エレインは咳払いをしてから、その先について口にした。「とまあ、そんな状況なの。西国は兵器の力で国をまとめ上げた。そして、他国の侵略を始めたわ。その邪魔になる魔獣を殺し、兵力を再度整えてから、北国と交戦した。これが二週間ほど前の話になるわね」

そこで語ったエレインはレギオニスに目を向ける。彼はまさにその戦闘を指揮していた人物らしい。確かに彼以上の語り手はいないだろう。

敗戦の将が自らの敗因を他国の重鎮の前で語らされるなんて、屈辱以外の何物でもない。しかし、レギオニスは言い淀むこともなく、口を開いた。

「先を語らせていたどころ。国境での戦いでは、西国が殺した魔獣の力によって蹂躪された。貴殿らなら知っていると思うが、霊核武装の力だ。彼らが殺した魔獣は、鬼とドラゴンの二種になる」

そういえば西国が魔獣を倒した話は耳にした覚えがある。魔獣が死んだ際に残す力の塊——霊核武装をよく知っている風見としては、北国が蹂躪されたという話も頷けた。

「具体的にどんな敵だったんだ？」

「霊核武装の力も形も定かではない。わかるのは、我らを蹂躪したのは、鬼とドラゴンの骸が交ざり合った何かというだけだ」

「交ざり合ったってどういうことだ？」

「そのままの意味だ。この鬼とは、西国でアスラと呼称されていた三面六臂の魔獣。四肢が断たれようと切断面を合わせて再生する。その上、元々通常の生物よりよほど優れた肉体を持ち、陽属性の律法で身体強化する化け物だったと聞く。同じく討伐されたドラゴンの亡骸を律法で下半身に融合させて戦場に出し、兵を蹂躪したのだ。これが西国の戦力であることは間違いないだろう」

鷲の上半身に獅子の下半身を持つグリフォンや、人面に獅子の体、蠍の尾を持つマンティコアをはじめとした、合成獣のような魔物の存在は聞いたことがある。

だが、後天的に合体して合成獣となる話は初耳だ。陽属性とは本来、生体機能の強化しかできない。その原則から外れるレギオニスの言葉が、風見には信じられなかった。

レギオニス本人もこれについては分析できていないのだろう。難しい顔をしている。「癒しの律法では、死体や他人の体を繋げられないという話は、私も学者から聞いていた。それを踏まえるならば、現れたのは亡骸というより、生きた霊核武装そのものと捉えるべきかもしれない」

「——！なるほど。そういう解釈ならあり得るかもしれないな」

霊核武装といえは、風見自身が持つ物と同じ、形ある武器を想像していた。

しかし、それだけではないのかもしれない。そもそも付加武装の素材でもグリフォン

なら風切り羽だったり、ゴーレムは核だったり、火鼠は体に散在する器官だったりした。それを思えば、魔獣が残す霊核武装もまた、様々な形があつてしかるべきだろう。

それが判明しただけでも十分だ。風見がレギオニスに視線を戻すと、話が再開される。「国境を陥落させた西国は、そのまま進軍してきた。そして二度目の失態があつた。我が軍は正面切つて戦うそのアスラが、西国の主戦力と思い込んでいた。だが、アスラはあくまで陽動だったのだ。それに注意を向けている間に、国の各地に存在する要所が奇襲された」

北国はこの大陸で最も国力があると聞いていた。それなのに、たつた二週間でいずれ国が呑まれるという状況となつたのだ。剣や弓、馬が戦場の主役であるこの世界では、あり得ない速度だつただろう。

本来、こんな奇襲は為しえない。なにせこの世界において注目すべき戦力は、有力な律法士だけだからだ。敵の律法士の動向はもちろん常に把握しており、それをもとに戦力分配する。

雑兵による奇襲に対応できる戦力は残すが、過剰戦力は残さない。そんなセオリーに従つた結果、律法士にも勝る兵器で武装した部隊に、抵抗する間もなく制圧された——そんな流れだ。

ユーリスとグローリアの表情はどこか険しくなっている。

魔獣まで殺した国とはいえ、こうまで侵攻が速いとは予想していなかつたらしい。

そして、レギオニスはこの争いの結末を語りはじめた。

「侵攻はまだ王都に及んでいない。しかし勝敗は決したも同然だ。敗戦の將たる私はその責を負い、戦場で散るものと考えていた。だが、そこで王と父にある使命を託されたのだ」

彼にとつてはこの先の話こそ重要なのだろう。一層表情を引き締めると、その場に片膝をつき、深く頭を垂れる。

「此度の危機を救つてほしいなどと現実から乖離した請願ではない。ただ、一つ提案がある」

グローリアとユーリスは、慈善活動としての加勢なんて考える素振りもない。しかしながら提案という言葉が出ると、多少なりとも興味を抱いたようである。

「いずれ彼の国は南と東にも手を伸ばすだろう。それを未然に防ぐためにも、この機を見逃さないでいただきたい。西国は現在、我が国の王都侵略に力を注いでいる。奴らの戦線が伸び、戦力が分散しているうちに南と東の両国で西国本土を攻めることこそ、最善策であると認識してもらいたい。いかがだろうか？」

その問いかけは価値があるものなのだろう。悪いものなら即座に断じるグローリアが、考えこんでいる。ユーリスも頷いて肯定的な意見を示しはじめた。

「北国としては現国王が死したとしても、親類縁者が継承するので問題はない。そして滅び切る前に南と東の西国に攻め込んでもらえれば戦況が好転する見込みがある。こちらとしても、脅威である西国を協力して黙らせられるかもしれない。なるほど、ここにいる三国の利害関係は一致していると示したいわけだね」

ユーリスの見立てでもそう悪くない話なのだろう。反論はない。

国同士が諍い合うこともなく、一致団結して敵に向き合う。そんな気配を感じた風見は、少しばかり胸を撫で下ろす。だがその時、不意に視界の端で嫌なものを捉えた。

グローリアが悪女のごとく口元を歪めている。その様を見た瞬間、風見の胃はキリリと痛んだ。

「提案は結構。ただし、話はそれで終わらないだろう？ 戦線が伸びれば脇が甘くなるのは、西の首魁だって百も承知。その対策として、攻め落とした数々の都市で北国の領民を人質とし、兵や農夫を寝返らせて即席の兵を作っている。その始末の悪さを無視しちゃいけないね」

こんな面倒な輩を相手にするのだから、何か報酬を寄越せ。そんな風にレギオニスを脅すかと思いきや、グローリアが目やる先は彼ではない。驚くべきことにユーリスを見ている。

「西国の奴らは北国の女子供を人質にして、半強制的に男たちを兵にしている。さらに

陰属性の律法で隷属化して従わせたりもしていると、密偵から報告があった。本来なら農夫も女子供も弓兵にするのが精々だが、そこは例の兵器様々。それで武装させれば、いっぱしの律法士並みに活用できる。そこが恐ろしいのさ。放っておけば北国の民は皆、西国に寝返ってしまう。——それだけじゃない。西国はすでにその手法で北国側から南国を攻めはじめている。南国はそれに備えることで手一杯だから、西に攻め入る余裕はないんじゃないのかい？」

グローリアは肩を揺らしてくつくと笑う。

ほれ、そこがお前の弱みだろう。けれども自分の国はそこまで困っていないんだよ。そんな風に、自国は南国より強い立場に立っていると言いたいのだろう。

「皇太子。あなたは私の国に、ご助力願いますと頭を下げる状況じゃないのかい？」

彼女は先日、会談が破綻しないように舵を取れと風見に言ったが、早速これだ。風見は頭痛を覚えずにはいられない。

風見はため息を堪えながらユーリスを見る。彼はまだ穏やかな表情のままだ。しかし、心の中ではグローリアを困らせるための算段を立てているに決まっている。

(それにしても、まさかエレインが事前に言っていた通りになるとは……)

風見は一人、驚きを胸に抱いていた。

先ほど、エレインは数分間で北と西の状況を伝えると共に、会議の見通しを伝えてく

れていた。その予測は、まさにこの状況の通りだったのである。次の展開として、ユーリスはグローリアに対して下手に出る必要はないと説明しはじめるらしい。

例えば西国に寝返った北国の兵に、東国から滅ぼさないと交渉を持ちかける。そんな話もあり得るが、いいのかとグローリアを脅して、妥協点を探しはじめて泥沼化。最悪、そうなるぞうだ。

エレインの予測は半信半疑だったが、現状を見る限り、当たらずとも遠からずなのかもしれない。帝王学等を修めていれば、こんな未来予測にも似た見通しがつくのだろうか。

共闘すればいいのに、これでは足の引つ張り合いに終わる。あくまで、対等に西への共同戦線を張る必要があるのだ。

そのため、風見がどうすればいいかも、エレインは伝えてくれていた。

ひっそりと彼女に目を向け、視線で頃合いを確認する。そして、風見は手を挙げた。

「ややこしいことはやめよう。要するに南国の弱みに東国はつけ込みたいんだよね。だったらその弱みさえなければ、対等な立場で話を進められるな?」

これから、国同士の狡猾なやり取りが始まるという時に、割って入る風見。するとユーリスが、珍しく目を丸くしてこちらを見つめてきた。

「驚いた。シンゴ、君はさっきまで大陸の情勢も知らなかったのに、そんなことを言い出すんだね」

「まったく。誰かに入れ知恵でもされたのかい?」

ユーリスに続いてグローリアまで、風見を軽くけなしてくる。喧嘩腰のやり取りをしていたくせに、こんな時だけ息を合わせる二人はなんなのだろうか。

風見はこめかみをびくびくとさせつつも、敢えてこの声を聞き流した。

「そもその話、西国が北国の民にやらせている侵攻を俺がなんとかすれば、南国の弱みもなくなる。そうしたら、ユーリスとグローリアは対等に西への対策を練り合えるな?」

二人に視線で確認してみると、はつきりと頷きが返ってくる。

しかしこれもまた意外そうな顔だ。真つ当な答えをさっさと導き出したこともあるが、何よりもこの提案が、風見の得意な医療や農業と明らかにかけ離れた内容だということもあるからだろうか。

ユーリスはふむと頷いてから問いかけてくる。

「それは願ってもないことだけれど、具体的にはどうするつもりだい?」

質問の形をとっているが、ユーリスには疑問を抱いている素振りが無い。むしろ期待した答えを確認しようとしているようだ。

確かにそうなのだろう。彼は『西国に対抗できるマレビト』の召喚を要請したと言った。つまり風見のスペックは西国への対抗策として、とつくに合格しているはずなのである。

とはいえ、風見はずっと戦争のような荒事を敬遠してきた。必要に迫られて援護したことはあっても、自ら望んだことはない。避けていたはずの思惑に乗るようで、風見としても悩ましいところだ。せめて、完全な宗旨替えではないことをはっきりと示すために、丁寧言葉を選ぶ。

「ダニや生水による感染症に、有毒植物。そういう知識で敵軍の侵攻を遅延させることならできる。人質を解放したっていいんだろ？ 国が荒れたら俺も困る。そういう範囲なら協力するさ」

根拠のないことではない。火鼠の撃退や東国との争いで妨害など、それらしいことをしてきている。その成果を確認しているユーリスにしても、身をもって体感したグロリアにしても、風見の言葉を荒唐無稽とは思っていないようだ。

——そして、こんな反応までエレインの予測通りなのである。

風見としては、まるで未来を見通しているかのような彼女の予測に驚き、胸が騒いだ。とはいえ困ることではない。ここまでくれば後はお偉いさんに任せても変にこじれないはずだ。

エレインに目をやる。やはり伊達に皇族ではない。ユーリスに勝るとも劣らない才女なのだろう。

「それはそうと、そうやって協力するなら俺はどこに行けばいいんだ？」

「国境は大方、魔獣の住処や急峻な地形で線引きがされているんだ。だから攻め入れられるポイントは少ない。平地や街が多くて一番警戒をしなければいけないのは、ハドリア教総本山付近だろうね」

ユーリスの言葉に、エレインも頷く。

「そこにはカインとシギン、それからアカネもいるわ。戦争を止めるために、西国の配下に置かれた北国軍の侵攻を押し止めているの。カインたちに加勢してあげて」

「わかった」

さてこれで会談も終わり——そう思ったところで、エレインが手を挙げて発言を求めた。

「それとね、ユーリスお兄様。私からもう一つ話があるのだけれどいいかしら？」

「ふむ、君からも？ どういう話かな」

思案顔で顎を揉んでいたユーリスは、何気なくエレインを見つめる。

これだけ先読みをして会談を丸く収めた彼女だ。きつと重要な話があるに違いない。

風見はそう思い、彼女を見つめる。だがしかし——

「私、カインと結婚したわ！」

「うん。……………うん？」

ユーリスは珍しく理解が追いつかない顔をし、グローリアは眉根を寄せて「は？」と声を漏らす。

この唐突すぎる結婚話はユーリスも知らぬところだったらしい。

皇族の結婚はそんなに軽々しく、事後報告で為せるものなのだろうか。

この世界の結婚の制度に詳しくない風見としては疑問しか浮かばない。話についていけないあまり、つい口を挟んでしまう。

「皇族の結婚って、そんな気軽にできることなのか…………？」

広く一般に認められた流れでないことは場の空気からもわかるものの、風見は一応ユーリスに確認する。

無論、返答は否定だ。ユーリスは本当に悩ましそうに眉間を揉みながら答える。

「ないとは言わない。身分違いの男女が駆け落ちする際、ハドリア教に出家する体でこういう既成事実を作ることはある。けれど僕らは身分が身分だ。皇帝や貴族の意向を伺わないと、余計な摩擦を生みかねない。父上への侮辱罪に、国家騒乱罪まで問われてもおかしくないことだよ」

「わかっているわ。でも、私がいち早くラヴァン領の次期領主の妻になる利の方が、

勝っているの。それに突然ではあったけれど、相手としては適当でしょう？ 時と場合さえ揃ってれば、誰に咎められることでもないわよね」

ユーリスの声に、エレインはけろっとして答える。

時と場合。その二点に絞った物言いに、場の空気はより一層引き締まった。

「君は何をするかわからないからね。騎士団長まで務めた辺境伯の子息が相手というだけなら、問題はないと思う。それ以外についても期待していいということだね？」

ユーリスの問いに対し、エレインは臆面もない様子で続ける。

「ええ、もちろん。この決断はこれからの南と東の両国に関わるわ」

何をするかわからないおてんば姫。そんな彼女の打って変わった様子に、一同は自然と視線を奪われた。

「あくまで対等に手を組むなら、まだ解消すべき議題があるでしょう？ そう、東国が私のお義父様であるドニさんを殺害したこと」

エレインの視線はグローリアと、その傍らにいる風見へ向けられる。

話がまとまりそうだったところに新たな火種だ。風見とグローリアに緊張が走る。

「これ、なかったことにしましょう。そうすれば上手くいくもの」

しかし、手の中にあるものを手品で消すように、エレインはパンと手を叩いて合わせた。



「な、なかったことって、ええ……」

その意外な言葉に、風見は思わず間の抜けた声を出す。

グロリアやユーリスはそんな馬鹿な真似はしない。エレインの言葉の裏にどんな思惑が隠れているのかを、探るような表情だ。

「ほら、やっぱり今の状態ってよくないじゃない。お義父様は不意打ちで亡くなった不名誉な記録が残る。カザミの仲間は手を下した責を問われてしまう。それに、我が国としても、有力貴族を殺害した相手と、賠償もなしに付き合うなんて無理よね。我が国にばかり不利益がある中で頭を下げると言われて、お兄様はこれからどういびり返す予定だったのかしら？」

それを聞いたユーリスはふっと笑う。

「人聞きが悪いね。幾度も争いはあったけれど、国境を守り切っていた有能な辺境伯が亡くなったんだ。彼の実績相当の派兵を負担してもらいたいとは思っていたかな。僕が求めるとしたら、そのくらいのことだったよ？」

「私かもしれない要求に応じたら、うちの兵を西国の様子を見るための捨て駒に使うって魂胆（たまごころ）だらう？ 冗談じゃないね」

ユーリスは東国に報復をかねた代償を要求するつもりだったらしい。それを見透（みす）かすグロリアの目もきつくなり、空気はぎすぎすしはじめた。

エレインはその空気を塗り替えるように、ことさらに明るい声を出す。「だからこそなのよ。事実のまま進めようとする、不和しか残らない。でも、もしお義父様の死が両国の間を取り持とうとした際の不慮の事故だったとしたら、話は変わる問題があるとしても、こんな提案をした私が、カインに対してやましい気持ちを抱えることになるだけね」

エレインの話す理屈はわかる。しかし、末姫で向けられる期待が小さい彼女が、何故ここまで身を砕こうとするのが理解できない。風見は思わず問いかけた。

「それは確かに都合がいいけど、なんでエレインがそこまでするんだ？」

「それが一番国民のためになるからよ。私がカインに対して頭を下げて頼み込めば、他は上手くいく。この流れが滞れば何千、何万人の国民に影響するのよ？ 責を負うのは私一人で結構。だって、それしかできないもの」

胸を張ったエレインは、ユーリスを見つめる。

「その口実作りのためにも、私はハドリア教総本山でカインと婚姻を結んできたわ。というわけでお兄様。私はここで、次期領主であるカインの代理として事務作業をします。それに関して至らぬところにはご助力願えないかしら？」

毅然とした彼女に文句を言う者はいなかった。

ぎすぎすしていた先ほどまでの空気もすっかり変わり、ユーリスは納得した様子で思

考を再開している。

「……なるほどね。君の言うことには一理ある。確かに東国に対価を支払ってもらうより、仲良く動いた方が利益は大きいかもしれない。グローリアさん。あなたはどうかお考えですか？」

「悪い話ではないね。話は面倒がない方が助かるよ」

ユーリスの問いに、グローリアは頷いて返す。

これで一応の議論は出揃ったらしい。ライラはそれを見て取ると、再び場を仕切りはじめる。

「それでは、議論は決したということでもよろしいでしょうか？ 東国と南国が協力して西国に対抗する件については書面に書き起こさせていただき、両者の了解を得て調印したく思います」

「ああ、構わないよ」

「同じくだ」

ユーリスに続き、グローリアも了承する。

本当に驚くべきことに、この会談はエレイン主導のもと、丸く収まったのだった。

その後、各国の代表者とライラは、文書作成や詰めの話やらを始めるという。お役御

免となった風見とエレイン、レギオニスの三名は退室した。

この場での決定は大きな意味を持つ。重い荷がようやく下りたことで、風見は息を吐いた。

「これでよかったのか？」

焦ることもなく事を進められたのはエレインのおかげである。問いかけると彼女は頷いた。

「上出来ね。あとは昨日あなたが関わった魔獣絡みの大捕り物にお義父様のごじつけて、私が領の運営を上手く回せば終わりね。でも、私こそ疑問だわ。カザミはこれでよかったの？」

医療や農業から離れ、自ら争いの渦中に飛び込むという選択である。そんなことは望むところではなかったはずだろうにと、エレインは心配の眼差しを向けてきた。

確かに我ながら大きな方向転換だ。けれど、風見は頷いた。

「その通りなんですけど、結局は避けられそうもないしな……」

「それはどういうこと？」

風見はこの国で、大事な仲間を——守るべきものを得た。この国に波乱が起きれば、被害は避けようがない。しかし実はそれ以外にも理由はあるのだ。

「うーんと、西国への対応策としてユーリスが俺を使おうとしたのと同じだ。憶測で

しかないんだけど、ドリアードは俺が否応なく今回のことに関わるように根回しする気がしてな」

それを耳にしたエレインはすぐには理解できない様子だったが、風見のセリフを元に熟考する。

「ドリアード……。あなたが言うことだし、あの魔獣ドリアードのことかしら？」

「ああ。そのドリアードが西国の動きから、戦火が広がることを予見していたんだよ。

無関係ではいられないともな」

「驚きね。アースドラゴンもそうだけど、もう一頭すごいのもついてきていたし。カザミは人に頼られるだけじゃなくて、魔獣にまで期待をされているのね？」

同じマレピトであるアカネはそんなことがなかったのだろう。エレインは驚きを示した後、素直に感心した様子で見つめてきた。

いや、ただ見るにしては、やけに風見を凝視する。そしてずいとい詰め寄ってくるので、風見の方が身を引いてしまう。

「ねえ、カザミ。少し失礼かもしれないけれど、私、あなたを褒めたいわ。あなたがそうしてくれたことで救われた国民は、少なくなかったと思うもの。それに魔物と上手く暮らせる方法も作ってくれているのでしょ？ それを労りたいのよ。ちよつと屈んでくれないかしら」